

日本栄養学教育学会の会員増対策で、強固な組織へ

日本栄養学教育学会理事長 中村 丁次

日本栄養学教育学会は、国立健康栄養研究所の田中平三元理事長の尽力により、平成24年(2012年)8月に正式に発足しました。あれから10年が経過しました。この10年間、私達は、医学、薬学、看護学と同様な教育学会を創造し、会を存続させることに必死でした。多くの人々の努力により雑誌の発行、ニュースメールの発信、さらに年次総会の開催を中断させることなく実施して来ました。お陰様で、栄養学の研究や教育のあり方、管理栄養士養成課程の問題点や今後の方向性等、活発に議論し、自分たちの職務の発展に役立たせてきました。特に一昨年から発生したcovid-19によるパンデミック下での教育、研究のあり方は、難解な課題で真剣に議論し、何とか教育の質は担保することができました。

パンデミック以前、オンラインによる遠隔教育はIT社会の発展による将来的課題だと思っておりましたが、緊急のコロナ禍で、その是非や効果的方法の開発の議論が不十分なままに、一挙に進んだのです。パンデミックは、いずれは終息します。しかし、私たちは、引き続き、教育で最も重要視される対面教育をどのように展開すべきなのかを議論する必要があります。人間関係が希薄なままに教育をしたとしても、管理栄養士としての知識は教えるが、信頼でき、尊敬される真の専門職として養成できているのか不安は残ります。

さらに、このパニックはさらに重要な副作用をもたらしました。リアルな学会や研修会、さらに懇親会が開催されないために、会員同士の人間関係が希薄で、粗雑になり、学会の会員が増加しないのです。この傾向は、他の学会や職能団体でも同様で、増加しないどころか、むしろ減少傾向にあります。会員数が減少すれば、学会活動のアピリテーは減少すると同時に会の運営にも支障をきたす危険もあります。

専門家の適正な教育、養成には、生涯にわたり教育・研究が必要であり、それを底辺から支えてくれるのは自分が所属している学会です。大学等の教育機関で学んだことは基礎的知識と技術を習得したのであり、専門性を高めるには卒業後の学習が必要であり、そのことを保証するには、自分たちで、自分たちの領域を発展させる学会を育てることであります。学会は、一般の会社や団体と比べると作りやすいのですが、いわば根無し草で、会員の熱意と経済的支援が無くなると簡単に消滅してしまいます。

人間には悩みはつきもので、専門職ともなると超えなければならない壁は、さらに高くなります。一人で悩むのではなく、同じ志を持つ者が集まり多くの議論を積み重ねた方が、より高い壁を乗り越えることができます。栄養学という学問の発展と管理栄養士、栄養士という職業人の社会的地位の向上を願うなら、できる限りこの日本栄養学教育学会を大きくし、巨大な組織にすることです。管理栄養士、栄養士の養成校の教員が日本栄養学教育学会の会員になる理由はそこにあります。

今年の目標に、一年間に少なくとも10人の関係者に声をかけて下さい。まず、「日本栄養学教育学会を知っていますか？」から始めるといいですね。